

# 市場から世界をみれば



情報システム株式会社

大谷淳一



が野放図に拡散しないように制御できるのか、とみ換えて技術の対価をめぐり、争いである。モンサント社はG M作物の特許を申請し、開発費を回収し、新しい種子をモンサントから買わなければならぬ。さらに利益を得ようとする。これは「種子戦争」として知られている。一方で、G M作物から得た種子の再植え付けが実際に実行されているとすれば、どこかにこぼれ落ちた種もやがて発芽するはずである。G M作物はすでに至るところに存在しているとみなす必要がある。制御は不可能であると考えるのが自然だろう。

南米におけるG M作物の栽培は、増加の一途をたどっている。ある国ではG M作物が非G M作物をしのぎ、耕作地の過半を占めているケースもある。一方で、G M作物から得た種子の再植え付けが実際に実行されているとすれば、どこかにこぼれ落ちた種もやがて発芽するはずである。G M作物はすでに至るところに存在しているとみなす必要がある。制御は不可能であると考えるのが自然だろう。

## 第14回「G M(遺伝子組み換え種子)戦争」下

「染」と言うべき事態である。一番簡単な方法は「再知られていない種子や、取ろうとしている。繰り返す。やっかいなのは、G M作物の栽培にできない種子の過去に喪失され忘れ去られた種子の中に、とん一見しただけでは違いを判別できないことだ。2の「利益優先型の紛争」の実態は、遺伝子組代で種子が終了して栽培できない種子は、一世でもない宝が埋まっていた。また、毒性があるという争いである。モンサント社はG M作物の特許を申請し、開発費を回収し、新しい種子をモンサントから買わなければならぬ。さらに利益を得ようとする。これは「種子戦争」として知られている。一方で、G M作物から得た種子の再植え付けが実際に実行されているとすれば、どこかにこぼれ落ちた種もやがて発芽するはずである。G M作物はすでに至るところに存在しているとみなす必要がある。制御は不可能であると考えるのが自然だろう。

「種子戦争」として知られている。一方で、G M作物から得た種子の再植え付けが実際に実行されているとすれば、どこかにこぼれ落ちた種もやがて発芽するはずである。G M作物はすでに至るところに存在しているとみなす必要がある。制御は不可能であると考えるのが自然だろう。

「種子戦争」として知られている。一方で、G M作物から得た種子の再植え付けが実際に実行されているとすれば、どこかにこぼれ落ちた種もやがて発芽するはずである。G M作物はすでに至るところに存在しているとみなす必要がある。制御は不可能であると考えるのが自然だろう。

「種子戦争」として知られている。一方で、G M作物から得た種子の再植え付けが実際に実行されているとすれば、どこかにこぼれ落ちた種もやがて発芽するはずである。G M作物はすでに至るところに存在しているとみなす必要がある。制御は不可能であると考えるのが自然だろう。

### 【略歴】

1957年北海道美唄市生まれ。85年、食品管理、生鮮管理のシステムを開発する情報システムを創業。荷受卸売「青果卸の業務改善」「食糧操作」などがある。